

新しい歴史論争フェーズ を生み出す起爆剤

オーラル・ヒストリーに立脚して従来の歴史研究を批判

関根政美

保苺 実著

▲ラディカル・オーラル・ヒストリー

オーラル・ヒストリー先住民アボリジニの歴史実践

9・15刊 A 5 判336頁 本体2200円

御茶の水書房

アボリジニの語る歴史を 近代歴史研究の方法と同等なものとして 捉えよ、という主張

オーストラリアでは一九七〇年代以降、歴史学者やメディアが「歴史戦争(History Wars)」が終いだが、オーストラリア史の書き方に関する大論争は、第二世界大戦後にはじまる。第一フェーズは一九五〇年代から六〇年代の「隣接国対立期」である。戦前のオーストラリア史は、英国系白人リット入植者による経済・社会発展物語であり、英帝国内の一環であった。戦後独立の国民国家として自立した際に、白人資本家階級はよく労働者階級とその仲間意識・平等主義・反権威主義に焦点が絞られ、「無階級社会労働者天国の歴史」が語られてきた。現在でも流通するイメージは同時代の産物である。

第二フェーズの六〇年代後半でも、資本家階級中心とあれ労働者階級中心とあれ、歴史家は、旧世界ヨーロッパに対してオーストラリアを無階級立憲新世界として描き、啓蒙精神に奮起国として自画自賛する傾向にあった。それに反対し、オーストラリアは物欲まみれの凡人社会で、旧世界と変わらず、没落的な世俗・俗物的で、物質主義的な資本主義社会だと冷めた口調でオーストラリア史を描くM・クラフが登場する。これは、啓蒙的歴史観に慣れた親しんだ伝統的歴史家を羨望

せ白人入植以来の開拓努力を否定しかねないので各方面より攻撃された。共産主義者だとき非難されたクラフの歴史観は、「距離の暴虐」に極まらつた地の果てに西歐資本主義文明を移植した先人の努力を賞賛する歴史家G・アレイニのそれとは大きく対立した。

七〇年代半ばになると、滅亡の歴史を歩んだ先住民の救いをめぐる重大な歴史論争が浮上る。それ以前の歴史は、男性マジョリティ中心史であり、アインリアの視点から批判されはじめた。先住民については、一九七〇年代半、ロリーが、一九八〇年代は日・レイナルスがアボリジニ社会階級の歴史を明らかにし、多くの国民に衝撃を与えた。先住民被虐史はアボリジニへの謝罪要求の土台となり、従来の白人中心の「進歩・発展史観」を批判する。一九九〇年代には保守的政治家や歴史家よりも、この歴史観は「啓蒙史観」だと非難されはじめた。アボリジニ史と白人史の対立が第三フェーズである。

保苺は、以上の真に歴史戦争にさらした巨大な論争をもち込む。保苺は、歴史戦争は専門家による近代的歴史構築という権力上の論争に過ぎないと批判する。それがマジョリティ白人中心であれ、マジョリティ非白人中心であれ、文

献資料中心に客観的歴史的事実を積み上げて書く「記憶」中心のもので、文字無き人々の「記憶」資料は二義的で偏用できぬものとして、軽視・無視されてしまつて問題だ。記録無き先住民の歴史の語りには必然的に「排除」されてしまつた。

保苺は、オースル・ヒストリーに立脚して従来の歴史研究を批判する。今まで、アボリジニは近代的な意味での歴史感覚は全くドリーミンという大地創世の過去時代・現在の間を結ぶ時間連続的な歴史はもたないといわれた。先住民の語りは、神話や物珍しい奇妙な「お話し」として珍重されても、歴史研究の対象からは排除されてきた。そして、なによりも歴史家は、アボリジニが語る歴史にはまったく関心を示さず、それは、もっぱら文化人類学者の研究領域だとみなした。保苺はしたがに、アボリジニ自身が語る白人入植以後の歴史を解き明かそうと試みるので啓蒙史観に堪える。しかし、啓蒙史観を論じる人々も近代的歴史研究に立脚しアボリジニ自身の語りにも耳を傾けようとはせず、文献資料のみ依存する欠点があると批判する。こうした歴史研究は、結局、近代的手法に基づくオーストラリア国民史とを歴史研究の主軸とする研究者の態度に基づくものである。白

人入植後の歴史を同時に捉えできたアボリジニの歴史の語りには真摯に耳を傾け、歴史の多様性・多声性に注目し、先住民の語りも白人史の補充物ではなく独立の歴史として尊重する必要がある、と「進歩的」などを保苺はいふ。

保苺は、その短い人生において自ら編集した最初で最後の著書となる本書でアボリジニが語る白人侵略史を体系的に紹介する。そのなかには、近代的歴史研究の方法論からしても許容できない内容が含まれる。保苺は、それらを野蛮人の語りとして切り捨てず真摯に耳を傾けようといふ。人間は啓蒙者であるように歴史も啓蒙者である。保苺は忍耐強くアボリジニの畏れおそい語りを取り、まごめ、その概要を明らかにし、解説した世界最初の研究者であろう。彼の研究は、第四の歴史論争フェーズを生み出す起爆剤だ。その声に真摯に耳を傾け論争を展開する歴史家が今後どのくらい登場するかは、歴史家でない評者には分からない。アボリジニの語る歴史を近代歴史研究の方法と同等なものとして扱え、といふこともまた大きな論争の火種を養って、保苺はドリーミンの世界に旅立った。

(慶應義塾大学教授)